
恋のおまじない

飯野こゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋のおまじない

【ZPDF】

Z6054E

【作者名】

飯野こじゅみ

【あらすじ】

私の通っている高校には代々伝わる恋のおまじないがあるの！憧れの先輩に近づけますようにと思っていたのに、偶然の再会が私の気持ちを揺さぶつて。どうなる？私！

恋のおまじない

私の通つている高校には代々伝わる恋のおまじないがある。私はそのおまじないをするのに必要なものを探す為、子供の頃に良く遊んだ原っぱへと久し振りに足を運んでいた。

たかがおまじない、されどおまじない。

両思いになつたいとは思うけど、そこまでは欲張らなくていい。少しでも、憧れの先輩に近づけますように。

そう思つていたのだけれど……

その時すでに私の本当の恋は始まつていたのかも知れない。

「おはよー」

誰にこうわけでもなく、顔を出しながらドアをくぐつ、自分の席に着いた。

ここは廊下側のあまり日の当たらない外れの席。

すると、直ぐに麻耶がやつってきた。

「香梨菜。見つかった？」

私の顔を見れば解るでしょ！

「まだ、ちつとも見つからないよ～」

学校帰りに探し続けても「4日も経つてしまつた。

私以外の子は1日、かかつたとしても次の日には見つかつていると「いつのこ。

「香梨菜は集中力がないんじゃないの。」

なんて、自分は直ぐに見つかってー。
少し恨めしい気持ちで麻耶を見上げた。

そう私が探しているのは4葉のクローバー。
4枚枚の葉のうち合い向かつて2枚に自分のイニシャル、その間に
好きな人のイニシャルを書いて、英語の辞書に挟むんだ。
何で英語の辞書なのかは解らないけど。

そしてクローバーを挟むページも何処でもいいわけじゃなくて。
自分の誕生日と同じページに挟んで置くの。
5月31日の私は531ページという具合に。
その辞書を1ヶ月間、1日も欠かさず枕にして寝ると両思いになれ
る確率が上がるっていうおまじないなの！

「探す場所変えてみたら？結構田先が変わると見つかるもんなんじ
やないの？」

麻耶の言葉に納得するものの。

「場所を変えちゃうと何だか負けたような気がしない？」
なんだか、悔しいじゃない？きっとあるはずなんだから。

私の言葉に反応して麻耶が大声をあげた。

「香梨菜つたら可笑しいよー負けちゃうつて何？」
その言葉に釣られて歩美と愛がやつてきた。

「香梨菜が負けちゃうつて？」
歩美と愛に説明する麻耶。

「何か解るかも。」

ふと考へ込む顔をみせるも、愛はにっこり微笑み、そつ声に出した。
やつぱり愛！解つてくれるんだ。
でも、次の瞬間

「「全然解らない～」」

麻耶と歩美の言葉が重なった。

解つてくれなくてもいいんだもん。

今度は2人を恨めしい目で睨んでみた。

「まあまあ、みんない加減にしなよ。2人はもう突っ込まない。
香梨菜もそんな目でみないの。それより久し振りにみんなであそこ
行かない？」

「やつぱり愛はいつも私達の仲裁をしてくれる。

私達4人がいつも一緒にいれるのも愛がいるからかもしれない。
生まれ月は4人の中で一番遅いのに一番お姉さんみたいな存在だつ
たりする。

「私はバスかな」

せつかく、仲裁してくれた愛には悪いけど、天氣もいいし、今田こ
そ見つけられそうな気がするんだ。

「香梨菜行かないの？あんたが一番好きなのに！」

麻耶に言われた。

私だつて、こんな風に断る口がくるなんて思いもしなかつたよ。

あそこといふのは1つ先の駅近くのケーキ屋さん。

そのイチゴショートは絶品！

生クリームは甘いのにくどく無くていくつ食べても飽きないくらい。

でも、予算の都合で2つまでしか食べたことはないけどね。

そんなことを言つていたらチャイムが鳴つた。
がやがやとしていた皆の声は席に着く為に引かれる椅子の音によつて搔き消される。

高校に入学して3ヶ月が過ぎよつとしていた。

私は放課後の4葉探しに気持ちが飛んでいたようだ、かなり上の空だつたらしい。

ちょっと大きさかもしれないけど、あつといつ間に放課後になつていた。

「香梨菜あ、本当に行かないの？」

歩美がひじを突ついた。

「美味しいぞ。苺だよ。もうシーズン終わっちゃうんだから」

今度は麻耶まで私の前に来て誘いに来た。

ちょっと後ろ髪をひかれるも、ここは4葉の方が重要だ。

想像しただけでも涎が出てきそつなのを堪えて、教科書をカバンに詰め込んだ。

「じゃあ、お先に」

振り返りもしないで一日散に教室をでた。

あのままあそこにいたら、誘惑に負けちゃいそつたから。

学校から私の家までバスで20分。

バス停から徒歩で3分の場所にある。

バス停に着くと発車時刻3分前。

タイミングはバツチリで今日こそ見つけられそうな気がした。

直ぐにバスは到着して

先輩に振り向いてもらひますよ！」

まだ見つけてもいない4葉を思い描きながら、バスに揺られた。バスに乗りながらもちょっとした公園が見えるとあそこにもあるんだろうななんて、思つてしまつて。

ぼーっと外を見ていたら私の降りるバス亭だった。

バスから降りると歩く時間も勿体無くて少し早足で家に向かつた。家に着くと靴を脱ぐ事もなく、玄関にカバンを置くと

「ちよつと出かけてくるー！」

と家にいるだらう母さんに声を掛け返事を聞く前に自転車に飛び乗つた。

「さあ今日こそ見つけてやるから、待つてなさい4葉あー」心の中で叫びながら、公園へ向かつたのだった。

初恋の人？！

公園は天気が良いせいか、小学生がいっぱいいた。

私がいつも4葉を探している原っぱは、ボール遊びが出来るので近くの子供達で溢れかえっていた。

キヤッチボールをしている子、サッカーをしている子達がいるのでもちょっと怖かつたけどそんなことを言つてはいる場合じゃない。

早速私は地面に這いつぶばつた。

昨日はここら辺まで探したよなあ。

独り言を言いながら、じーっと地面を見つめる。

子供の中で制服を着ている私は異様に目立っていたようで、30分も経つと幾人かの子供達にからかわれ始めてしまった。

「ねえちゃん、パンツ見えてんぞ～」

え～っ。

慌ててスカートを抑えてみる。

すると今度は

「ウソだよー、引っかかってやんのー！」

といいやがつた。

この一くそガキと心で思つてみると、今は4葉、4葉と意識を集中させて無視する事にした。

すると子供達は私が相手にしなかつたせいか、元の遊びへと戻つて行つた。

今度はスカートを気にしつつ、また地面と睨めっこ。
それからまた30分程した頃だろうか、せつせつのガキンちゃんの声が

「ねえちゃん、危なーい！」

私は、またかい今度は騙されないんだからと思つた瞬間。

”ボスつ”と私のお尻にもの凄い衝撃が……私の横にサッカーボールが転がつた。

痛い、痛すぎる。小学生でもこんな威力のあるボールを蹴れるものなの？！

途端に子供達の笑い声が聞こえた。
最悪だ。

お尻をさすりながら、振り返ると、田の前に見覚えのある男が笑いを堪えながら立つていた。

「悪い、浅田。」

そう言つたのは小中の同級生、今野陽人だつた。

「今野だつたの今のボール蹴つたのはーそれに笑いながら謝つたつて嬉しくないわよ。」

勢いでそう言つたのだが、改めて見ると久し振りに会つた今野は感じが変わつていた。

背も伸びてして髪型も違つせいか、少しがつこよくなつた？
でもそう思つたのは私だけだつたようだ

「お前、ちつとも変わつてねえなあ」と言われてしまつた。

前言撤回決定。

「大きなお世話です。」

まだ痛いお尻をさすりながら、口スした時間を取り戻す為にまた地面に視線を落とした。

すると、近くで様子を見ていた子供達がやつてきた。
その中の一人が

「「」のねえちゃん、兄ちゃんの知り合いなの？」
と聞いてきた。

あのパンツのことを言つたやつだ。

兄弟だつたんだあ、言われてみれば少し面影があるかも。
つていうか、こんな奴だつたよ今野つて。
お調子もので、いつも人の事カラかつていたつけ。

すると今野はとんでも無いことを言い始めた。

「おう、兄ちゃんの初恋の人だよ」

れいーっと、同級生だよというノリで今野は言つた。

カーッと身体が熱くなつた。

は・初恋つて。私がですかー。

途端に子供達が騒がしくなつた。
囁子たてるガキンチョーども。

でも私の思考回路はついていけなくて。

実は私もいいなと思った事が無いわけではないのだけど。
ノリが良くて、話をしてても楽しくて。
でも今野も彼女がいたし、私もその頃は彼氏がいたし。
ただそれだけだった。

「初恋だつたけど、今は違うぜ。俺、彼女いるし。告白じゃないから安心しろよな」
つて笑いだした。

ほつとしたけど、少しショックだつた?
ショックだつたー?!

今だつて先輩に近づけるよつて4葉を探しにきてるのに、何
考えてんの私つてば。

今野とはいつと、何事もなかつたかのよつな顔をして、まだからか
い続ける弟達に

「とつと練習してる。」

と一喝いれると、再び私の方を向いた。

「気がつかなかつたら」

今野の言葉に思わず頷いた。

「やつぱりなあ

と詰つて頭を搔きながらはにかんだ笑顔を見せた。

そんな今野にドキつとしてしまつ私。
何、なんなのこのドキドキは

「悪かった、こんな事言つて。でもさつさも言つたよつて俺今彼女いるから忘れてくれよな。初恋の人ってのは変わりないけどな。そいいや、浅田何してたんだ。コントクトでも探してるのか?それなら手伝つた。」

そういう今野に慌てて首を振つた。
まさか恋のおまじないの為に4葉を探しては恥ずかしくて言えないから。

「違うの、コントクトじゃないんだけど。大丈夫だから、ほら弟君待ってるよ。行つてあげて。」
と今野の背中を押した。

「そりか?大丈夫ならいいけど。じゃあ」
そう言って手を挙げ今野は走りだした。

私は思わず
「今野ー嬉しかつたよー」
つて言つてしまつた。

今野は一瞬立ち止まり、前を向いたまま片手を突き上げた。

そつかあ今野は彼女がいるんだあ。

中学を卒業して3ヶ月。

少しかつこよくなつた彼の後ろ姿を見送つた。

そつそつ、私は4葉を探さなきや。

ふと足元を見るとあんなに見つからなかつた4葉が今まで今野が立つていた場所に有つた。

今野のお陰かも。

大事に摘み取るとハンカチに包んでポケットにしました。

揺れる想い

机に向かって、じーっと4葉を見つめる。
あれほど探していた4葉なのに私はイニシャルを書くのを迷っていた。

大好きだと思っていた先輩の顔が思い出せない。
浮かんでくるのはあの公園であった今野の顔ばかりだった。

何やつてんの私。

今野は彼女がいるつていいってたじやない。

ちょっと初恋だつて言われたからつて反応している自分が怖かった。

頭の中を空っぽにしたくて何度も首を振った。
目が回つただけだった。

明日学校行つて先輩の顔みたら復活するよね。
よし、今日はもう寝よう。

先ほどのように大事に4葉をハンカチにくるみ、引き出しの奥へしまった。

この時点で本当は解つていたんだ。

既に今野を好きになり始めている事を。

「また駄目だつたんだあ。
麻耶が話し掛けてきた。

結構暗い顔していたのだろうか？

自分でなぜか思つてはこないんだけど。

「ううん・・・」

嘘をつくつむりじやなかつたのだけど思わずかづいてしまつた。
愛は私の肩を叩いて

「あんまり根つめちや駄目だよ。」

つて言つてくれた。

「めん。

そんなに優しい顔しないで。

本当は昨日見つけてしまつたのだから。
それは4葉ではなく初めから上手く行く」とのない恋の相手なのだから。

「ほり、元気出して、渡り廊下行くんでしょー。
歩美の言葉にはつとした。

次は神田先輩の体育の時間。

神田弘樹先輩。

1つ上のサッカー部、

サラサラヘアーに、小顔で、背も高く、頭も良い。

我が校のアイドル的存在だ。

昇降口から校庭に行く姿を毎回欠かさず見ていたのに、今日はすっかり忘れていた。

そんな私の様子を愛はじつとみていたのを気がつかなかつた。

「やっぱり、今日も格好よかつたねえ」

歩美の言葉に頷く私。

「何かテンション低くない？」

麻耶が私の顔を覗き込んだ。

「そんなことないよ。」

そんなことないよ、と言いつつ今度ははつきり解つてしまつた。
ドキドキが違うのだ。

確かに格好よいけど
素敵だと思うけど

あの今野の顔を見たときのドキドキとは全然違つていたのだから。

恋をする前から解つっていたことなのに気持ちがドーンと沈んでいたのだった。

なんで会つちゃつたんだろう。

あの時イチゴショートを食べに行つていたならこんな思いをする事
なかつたのに。

おまじないかあ。

4葉のクローバーが頭を過ぎる。

そして彼女いるからと笑つたあいつの顔が頭から離れなかつた。

教室へと戻る廊下で愛が

「何か悩み事？さつきからため息ついてるよ。大丈夫みんな気がついていないから。」

視線は前を向いたまま、私だけに聞こえるような囁き声だった。
どうして愛はわかるんだろう？

相談しても大丈夫かな？

彼女をいる人を好きになるなんて軽蔑されないかな。

そんな思いが駆け巡り躊躇してしまつ。

「大丈夫だよ。ただちょっと疲れただけ。」

私も愛だけ聞くように囁いた。

了解とばかりに愛はぐくと頷くと前を歩く麻耶と歩美の話に混ざつていつた。

3人の後ろ姿を眺めながら、昨日までの私を羨ましく思つてしまつた。

「香梨菜今日も探しに行くの？」

麻耶の言葉にちょっとびり胸を痛める。

本当はあるんだよ、昨日見つけたんだ。
そういうばいいのに何故か言えない私。
どうして嬉しそうじゃないの？と聞かれるのが怖いのかもしれない。

「今日は何だか疲れてるから家でぼーっとしてるよ。」

”ぼーっとしてるつて”
言つてる私が恥ずかしい。

「そうだよ、その方がいいかもよ。ゆっくり休んで明日に備えなつて。」

歩美はにこっと笑つて私の頭を撫でた。

愛は黙つて私を見ていた。

勘が鋭いからなあ。

人を気遣う事の出来る愛はみんなの様子を良く見ていてさり気無く
フォローもいれてくれたり。

バツチリ目が合い愛もまた優しい笑みをみせてくれた。

「めんよーみんな。

心の中で何度も謝った。

帰りのHRが終わると直ぐに家へと向かつ。

家に着くと制服も着替えずにまた机の上の4葉と睨めつゝ。
1時間以上悩んだものの結局私はイニシャルを書いて

そおつと英語の辞書にクローバーを挟んだ。

今日から宜しくね。

少々ごついがこの際我慢だ。

ちよつとの不安を抱えつつ食事をする為に部屋を出た。

イニシャル

あれから2日後。

やつと私は4葉を見つけられたことをみんなに話せた。

みんな口々に

「良かつたね」

と言つてくれた。

でも誰の名前を書いたかは言えなかつた。

そもそもみんなは私が先輩以外のイニシャルを書くとはこれっぽちも思つていなかつたようなので何も聞かれなかつたのだけど。

1ヵ月後が楽しみだね。

なんて嬉しそうに話をしていた。

でも実際は私と愛以外は彼がいたりなんかする。
それでもおまじないをしているのは、ずーっと一緒にいられますよ

うにー

と願う事らしく、恋のおまじないといつ行為を楽しんでいるようだ
つた。

英語の辞書に4葉を挟んで1週間経つた。

相変わらず私は渡り廊下に立つてゐる。

勿論先輩を見ることが一番の楽しみではなくなつていていたのだけれど、

麻耶達に連れられて断る事もできずにそのままいじつしている。

いつもと変わらず先輩の後姿を見送つていた。

「あー行つちやつた。」

歩美が呟くと、こつもだつたら校庭へと消えて行く先輩が、くるつ

と向きを変えて戻ってきた。

そして、渡り廊下を見上げて田が合つた？！

今までだつて、下校の時など偶然を装つて近くを歩いてみたりするも、先輩の視界になんて入つた事なかつたのに。

こんなこと初めてだつた。

しかも先輩は少し微笑んでくれたようにも見えた。

麻耶も歩美も愛も良かつたじゃん。

と先ほど起つた現実に二二二二二顔だ。

「うん」

言葉すくなく述べてみる。

”照れない照れない” なんて麻耶の声にもビビり反応したら思ひ浮かばなかつた。

もう限界だ。

1週間も黙つていた事素直に謝る。

心の中で決心した。

放課後思い切つて声を掛けた。

「ねえねえ、今日をあそびに行こうよー。」

でも返つてきたのは

麻耶と歩美の声が重なつた。

「梅雨の晴れ間で天気が良いから出かけようつて言われて・・・

「「「めん」」

麻耶が言つと

「同じく

歩美も同じらしい。

そつかあデートじゃしうがないよね。

折角勇氣を振り絞つて声掛けたのに、こんなものよね。

「私空いてるよ。たまには2人で行こつか。」

愛が言つてくれた。

「うんじゃあ今日は2人で行つて来るから。」

私がそういうと、「ごめんねーと言いつつ麻耶と歩美はわざわざと教室を出て行つてしまつた。

「さあ、私達も行こづー。」

愛に引つ張られて教室を出た。

昇降口まで来たら校門の先に誠君と一緒に歩美を見かけた。
後姿でもとても嬉しそうつて解つた。

「仲良いよね

愛も目に入つたみたいだつた。

「羨ましいなあ

勝手に口が開いていた。

「続きはゆつくり聞きましょー」

愛はにっこり笑い

「ねえ、私達も『トーントン』しない?」こんなに天気がいいんだからー。」
と言い出した。

「トーントン?」

「アーヴィートーー・コンビニでお菓子と飲み物買って公園行こうよ」
はしゃぐ愛に釣られて

「いいねー!公園トーート。行こう行こうー。」

そうして30分後、私達はあの公園に来ていた。

「いい公園だね。ここで4葉探しててたんだ」
周りを見渡してきょろきょろする愛。

「やうなんだ」

あの時以来きていた原っぱに腰を下ろした。

1つ、2つ呼吸を整えて

「あのね、私好きな人が出来たの。」

愛は私の顔を見て

「その割には、あんまり嬉しそうじゃないね。」
と言った。

やつぱり解るよね。

私は出来るだけ解り易いように言葉を選んで愛に説明した。
ところどころつづかえてしまった私は

「ゆづくつでいいから」

と優しい声を掛けながら背中をさすってくれた。

言い終わると緊張の一瞬。
愛はなんて言うんだろう。

軽蔑しちゃうかな？

彼女のいる幸せそうな相手の名前をクローバーに書いてしまった事。

「そっかあ。確かに彼女からしてみれば不愉快極まりないけど。人を好きになるつて単純じゃないからね。」

軽蔑はされなかつたけど、いいとも悪いとも言わなかつた愛。

最後に

「だつて、香梨菜が一番解つてるみたいだから。1つ言えることは麻耶だつて歩美だつてずつといられますようにつておなじないしてるでしょ。誰でもこの先の不安はちょっとはあるんじゃないのかな」と付け加えた。

愛に話せた事でちょっとだけ気持ちが軽くなつた。

確かに、彼のイニシャルを書いてしまつた事で罪悪感がある。他人の不幸を願つてるみたいで自分が嫌いになりそつだつた。先輩のイニシャルを書いたら違つてたんだろうけどなあ。

ふと考へた。

「あーっ」

問う突然声をあげた私に愛が不思議そうな顔をした。

今野陽人
かんだ・ひるひと

神田弘樹
かんだ・ひろき

2人共イニシャルが同じだつた。

今頃気がつくなんて、ちょっと間抜けじゃない。

話を聞いた愛もちょっと抜けてるかも！なんて笑い出した。

いつの間にか辺りも暗くなつてきたので一度私の家に行き母さんこ
�いを送つてもらうことにした。

愛の家まで母さんも交えてのおしゃべりは上まりませ、とっても樂し
い車内だった。

友情の証?!

昨日の夜は携帯で遊び過ぎて寝るのが深夜になってしまった。
今日は日曜日。

いつもの時間に鳴った田代ましを止め再びベッドに潜りこんだ。
大きな声を出しながら母さんが部屋に入ってきた。

「香梨菜! いつまで寝てるのー」

「良いじゃん。今日は日曜だよ。もう少し寝かせてよ。」
やつこって、やつこってはしゃがれてきた。やつこは枕に頭を乗せる。

「あーそれ、もしかしておまじない? !」

母さんが興奮しながらベッドに腰掛けた。

その声に飛び起きた。

「えー母さんの時からあるのー。」

何を隠そう私の通つてこる光洋台高校は母さんの母校だったらしい。
所謂先輩だ。

「母さんの時からって、その”おまじない”だって母さん達が考え
たんだもの! 」

ここ最近で一番のニュースだった。

驚いたのなんのって。

「それで、お前書いたのはこの前のやつちゃんなの? 」

「母さん何だか嬉しそうだ。
でも愛ちゃんって? 」

私は寝起きも手伝つて思考回路ショート寸前。

「なんで愛ちゃん?」

私が聞くと

「だつて友達でしょ?」

と会話が微妙に繋がらない。

「ちよつと待つて。」

母さんはそうつづりと、隣の部屋の屋根裏部屋へと上がりついた。

暫くして母さんの手には

光洋台高校の卒業アルバムと1冊の英語の辞書があった。

母さんがページを開くその場所には母さんの友達。

母さんを含め私も良く見知った人たちが、英語の辞書を持ってスナップ写真に納まっていた。

優さんでしょ、真理さんでしょ、それに幸子さんに母さん。

みんなたまに遊びにくる人達だ。

それにも母さんが私と同じ制服を着てるなんて…

不思議な感じだった。

そして、英語の辞書の

friend

というページを開くとすっかり乾燥された大きめのクローバーが挟んであった。

母さんは自分達4人がいつまでも友達でいられますよとの願いを込めて、一枚一枚に自分達のイニシャルを書き”友達”という單

語のページに挟んで枕にしようと考えたらしい。

何故1ヶ月なのかといとその友達の優さんが卒業式の1週間後に引越しをしてしまう事が2月に解ったから、それでみんなずっと友達でいられるようにとおまじないを考えたそうだ。

何故英語の辞書かというと、国語の辞書だと高校卒業しても頻繁に使いそだだから4葉がなくなりそうで。と笑う母。

確かに大学さえ行かなかつたらあまり辞書を引く必要もないだろうからね。

あくまでも、母さん含め、友人達の話だけれど。

私達のおまじないとは少し違うみたいだ。

好きな人のイニシャルを書いてなんて、とてもじやないけど母さんには恥ずかしくて言えなかつた。

何とかお母さんの追求をまのがれ、お腹が空いたと母さんと一緒に部屋を出た。

母さんは私にパンを渡すと”自分でやつて”と電話に向かつた。

そう電話の先は母さんの友人の一人、誰だかは解らなかつたけど

「やうやうあるおまじないがね・・・」

なんて話す母さんは嬉しそうだった。

私がトーストを食べ終わつても母さんの電話は終わらず、テーブルに

「公園に行つてくるね

とメモを残し自転車に乗つて公園へと向かつた。

私に愛に歩美に麻耶。

丁度4人組みだ。

私達もやつてみよつて…やつ思ひたつてまた4葉を探しにきたのだつた。

原つぱに着くとまたはいつづばつて4葉を探し始める。

暫くすると

「あーパンツのねえわやんだ!」

と元氣のいい声が。

あれ程生意氣なガキンちょだと思つていて、今野の弟だと解ると可愛く思えるのはいかがなものだらう。
げんきんな私だ。

「いそにわせ」

とこゝと

「今日はスカートじゃないんだ」

とこれまた可愛くなこ一言を。

こいつも学校でお調子ものなんだらうな。

なんて思つていたら

「ねえちゃんもあ陽人兄ちゃんの事好きだつたりする?」

なんて爆弾発言をした。

「えつ、ねえちゃんもつてあんたの兄さん、ちゃんと彼女がいるんでしょ?」

小学生相手に動搖しつづけの顔つと

「さあ、俺は知らないよ。見たことないし、それに兄ちゃんサッカーばかりで遊んでる暇なんてなさそうだけど。」

弟君はそう言った。

「ういえ、中学もサッカー部だったっけ。

それはおいといて、彼女のことば、弟が見たことなくたって、本人がいるつて言ったのだから間違いないだらうけど。

「あの後さ、兄ちゃん。あんたと会つてから妙に機嫌が良くな。」「なんて嬉しい」と言つてくれる。

でも私は期待なんかしちゃいけないとばかりに

「じゃあ、彼女といい事でもあつたのかもよ。」「

自分で言つて落ち込んじやう。別な事があるだろ?」。

「ふーん」

どういう訳か弟君は私の隣に座つて私の視線の先を見つめている。

「あつた。あつあつちにも。」「

意味深な言葉を言い出した。

「お姉ちゃん、じにみてんの?・じおりで、何日もはこつばつてる訳だ。」

とけりけら笑いだした。

情けない。

「じゃあ、またねー」

と弟君が去つていった。

先ほど彼の落とした目線の先には、確かにあつちにも、その向こうのあつちにもりっぱな4葉があつたりして。

どこの見てるの私つてば。

集中力のなさなのか、大雑把なのか。
どちらにしても駄目な奴じやん。

そう思った。

月曜日、早速畠におまじないの話をした。

「なるほどねえだから英語の辞書だつたんだ。
納得納得とばかりに頷く麻耶。

「まさか、香梨菜の母さん達が考えたとはね」と歩美。

「時代と共におまじないも変化してきたわけか」と愛。

3人それぞれの意見を言った後は

「やるしかないでしょ！」
と全員一致の答えだった。

「じゃあ、最後に見つけた香梨菜のおまじないが終わった後ね」
愛が言った。

そっか、そうだよね。

一つお願いしているところだから、一緒に挟むのはタブーかもね。
良かったあもう探ししかつたつて言わなくて。
そのうちに干からびちゃうよね、4葉のクローバー。
今のうちにパウチかけてしおりにでもしてみよう。

そして、私は麻耶と歩美にまだ話せないでいる。

この前決心したのに、やっぱり彼氏持ちの彼女達には言えないでい

た。

愛は自分で言えるようになつたらで大丈夫だよ。
と言つてくれたのだけど。

そんな中歩美が

「ニコースニユース。来週サッカー部が海南校と練習試合するつて
よー。」

ラツキーじゃん。神田先輩の試合の高校で見れるなんて！
と私に微笑む麻耶。

私は海南高校という名前に反応していた。
今野が行つてる学校だ。

すると歩美が

「あーもう、香梨菜つたらもう赤くなつてるよ。」
と私をからかつた。

違うんだよーとも言えず。

「あはははっ」

と乾いた笑いしか出てこなかつた。

愛だけは事情をしつつしているので困つた子だと言わんがばかりに私の
肩をポンポンと叩いた。

あれから全く会つていなかつたので私は妙なドキドキが止まらなか
つた。

雨降らなきやいいな。

それより湿氣で髪の毛はねないよつて氣をつけなくちゃなんて考えてしまった。

その頃からだらうか？何故か神田先輩と目が合つよつた気がするのは。

目が合うだけでない、笑いかけてくれているような気がするのだが。はて？都合の良い解釈をしているだけなんだろうか？

そうして、ある日の放課後。

いつものようにバスに揺られていると、歩道に1組の男女がいた。仲よさそうに、肘で相手の腕をつっついたり、つっつかれたり。仲良しカップルだ。

なんて、のほほーんとみていたら、急に胸がキューンを苦しくなつてしまつた。

そう、そこにいたのは今野だった。

隣にいる人は誰だか解らないが、うちの高校の制服を着ていた。

1年じゃないと思う。

年上なのかな？

今野の手には彼女のだらうスポーツバックが握られて。

知らないうちに涙が溢れて止まらなかつた。
あんなに仲の良い2人なのに。

誰がみても私は邪魔者だね。

それにしてもこの涙はいつ止まるんだろう。

私の降りるバス停が近づいても涙が止まることはなかつた。
仕方なく、ハンカチを目にあてバスを降りた。

家に帰るとすぐにベットに倒れこみ、顔を布団に押し付けた。

見たくなかつた

涙が止まらないまま私は制服姿で寝てしまった。
ふと気がつくと夜中の3時。

机の上には

「少しせいいから、食べなさい」

と書いたメモとおにぎりが2つ並んでいた。
泣きすぎたせいか、あんなにショックだったにも関わらず私は食欲
があるようで結局2つとも食べてしまった。
でもちつとも元気はでなかつたけど。

今更ながらに制服を脱ぎパジャマに着替えた。

顔が腫れぼつたいのが解る。

あんだけ泣いたのだから当たり前って言えば当たり前なんだけど・・・

鏡を見るのがとつても怖かつた。

そして、やつてはいけないと思いつつ、英語の辞書を枕にしてしま
う私。

自分が嫌いになりそうだった。

きて欲しくないと願つても毎日朝はきてしまつもので。いつそ夢だつたら良かつたのになんて思つても虚しいだけだつた。泣き疲れて、身体もだるかつた。休みたいな。

すると、

「香梨菜、起きたの？」

と母さんが部屋に入つてきた。

母さんは何も言わずに私の顔をそつと撫でてくれた。

田線を机に向けてお皿を確認したのだらう。

小さく息を吐き

「休む？」

と聞いてきた。

「いいの？」

「お母さんだつて、女の子だつたわよ」

と立ち上がりつて、ポンポンと私の頭に二度手を置いた。そして、空になつたお皿を持って部屋を出て行つた。

安心した私はもう一度ベットに潜りこんだ。

でも田をつぶると昨日の楽しそうな今野の顔が浮かんできてしまなに泣いたのにまた涙が零れてきた。

初めから解つていたことなの

「そう、初めから解っていたのだ。

それなのに今野を好きになってしまったのだ。

誰が悪いわけでもない、自分が悪いだけなのだ。

あんなに楽しそうな彼女を彼から引き離そうとしている。
おまじないをしていふと言つた事はそういう事だから。

何度も考へてもそこには答えがたどり着く。

学校を休みたかったのは自分なのだが、いつも一人で部屋に籠つていると頭がパンクしそうだった。

何か飲もうとキッチンへと向い冷蔵庫を空けた。
よく冷えたウーロン茶をコップに注ぎ一気に飲み干した。

「どう? たまにはおばあちゃんのところに行いつか。おじこあちゃんお友

達と温泉旅行行つておばあちゃん一人なんだつて!」

唐突に母さんが言つた。

そういうえば最近行つてなかつたな。

私は直ぐに頷いた。

「そうと解れば、ハイ。」

そういうつて渡されたのは保冷剤。

皿を冷やせつて事だね。

「ありがと。」

そういうつて洗面台に置いてあるタオルにくるんで皿に当つた。

ひんやりして気持ちが良かつた。

それから30分後、

「どれどれ？」

なんて私の顔を覗き込む母さん。

「まあ、こんなもんでいいでしょ。」

と私から保冷剤を取り上げると、準備準備と私を2階へ押しやつた。

まだ、腫れぼつたいのは解つたけどしようがないもんね。

気分を変える為にお気に入りの服を取り出すと鏡をみないよつて袖を通した。

ふとベットに置いてある辞書が田に入る。

誰に向かつてなのか

「いめんね」

と齒じて母さんの待つコビングへ降りていった。

おばあちゃん家は車で1時間。

道が空いている時には40分位でつくるのだけど、今日は平日の午前中。

渋滞は真逃れないところだ。

私の気分とはうつて変わって天気は良好。

渋滞さえなかつたら最高のドライブ日和だった。

「なんで、こんな道混んでるのかしらねえ」

なんて言つてゐるけど母さんはべつにイライラした様子も見せず、ラジオから流れているメロディを口ずさんでいる。

懐メロらしく私にはわいぱりな歌だった。

「おひあんないじじの店あつたつけ？」

母さんの言葉に田を向けるとやうにログハウス風の可憐ひしこのお店があつた。

「寄つちやう？ 美味しいケーキあるかもよ。」

母さんは私が断るとは思つていなこつで、私が返事をする前にウインカーを出し、車線を変更していった。

「勿論ー。」

遅らばせながら返事をした。
母さんはこいつに笑つた。

お店へ入るとやつぱり正解！

お店の中はまるで森の中の喫茶店？！ん～表現不足で申し訳ないけど素敵なお店だった。

「じつあむ～おはあひやん家までもつに行へ～それとわいりで食べやひ～」

いたずらつてのよつて笑つ母さん。

ちゅつと可憐になんて黙つてしまつた。

「今度また食べに来よつよ。おばあちゃんと一緒に食べたいな。」
と私が言つと

「それでしや、我が子だよ」

ヒーリ満悦。

そして、私が選ぶのはやつぱつシュー・ケーキだった。

お母さんは“オペラ”おばあちゃんは“モンブラン”を買つてお

店を出た。

久し振りに会つたおばあちゃんはいつもと変わらず優しい笑顔を向けてくれた。

「今日は学校お休みだつたのかい?」

と聞かれ、曖昧に頷いてみる。

お母さんも何も言わずにそのまま3人でケーキを食べ他愛もない話をしたりして、おまじないのことは全く思い出さなかつたとは言えなけれど、ほんの少しだけ気持ちが落ち着いていた。

私を無条件で可愛がつてくれるおばあちゃんの家だつたからかもしれないな。

楽しい時間もあつといつ間に過ぎて夕方になつてしまつた。

おばあちゃんは夕飯食べていいく?と言つてくれたけど、明日も学校があるし父さんも帰つてくるから帰ることにした。

尤もおばあちゃんで『ご飯を食べたとしても、お父さんは良かつたなつて言うだらうナビ』ね。

そんなお父さんだからお母さんは帰らつと言つたのかもしれない。子供の私がいうのもなんだけど両親はすつしべ仲が良いんだ。

照れくさいから言わないけどちょっと血縁の両親です。

家に着いたら、お母さんはテキパキと夕飯の準備を始めてあつといつ間に出来上がつた。

見事な手際の良さ!私がそうこうとお母さんは香梨菜もそつなるわよとふわっと笑つた。

夕飯を食べ終え、お風呂に入りまた寝る時間になつてしまつた。ベットに腰掛て、じつと英語の辞書を見つめる。

心苦しかつたけどまた枕にしてしまつた。

後1週間かあ。

ただのおまじないされどおまじない。
1週間良心との葛藤は続くんだろうな。
そう思いながら眠りに着いた。

とつとう今日で1ヶ月。

結局今まで枕にしてしまった。

おまじないをしたからって西郷になれるとは思ってはいなかつたけど、とても複雑な心境だつた。

学校へ着くと早速歩美が近寄ってきた。

「おはよー。確か香梨菜のおまじないって今日の夜で最後だよねー。」

「…………ながら私の顔を覗きこむ歩美。

「うん。」

そう頷いてみるものの。

私の心は複雑で。

「最近元気ないじゃん。どうしたの?でも明日はお楽しみだからね。今まで気合入っちゃうよ!」

なんて。

そつか、明日だつけ。

明日の土曜、私達の高校と今野の学校の練習試合がある。見たい気持ちはあるのだけど、サッカーしている今野を見てしまつともつと好きになつてしまいそうで怖かつた。行きたいけど行きたくない、それが本音だつた。

「そうだね。」

作り笑顔で歩美に答えた。

昼休み、次の美術授業のため、教室を移動していると廊下の先に神田先輩がいた。

神田先輩は友達に囲まれて大声で笑っている。
知らないうちに頬が緩んだ。

やつぱり格好良いよな、なんて。

でも知つてしまつたから、本当に好きな人のドキドキの違いを。

すれ違う瞬間、神田先輩は私を見て笑ってくれた。

笑つてくれた？！

氣のせいかと思つたけど、麻耶と歩美はキヤー・キヤー騒ぎだした。

「「香梨菜いつの間に！」」

2人は声を揃えて私を肘で突つついた。

私の方が聞きたかった。

なんでだろう？

愛だけは何も言わずに隣を歩いていた。

そういうしていのうちに土曜の朝はきてしまつて。
私はまた英語の辞書を枕にしてしまつた。

とうとう1ヶ月。

私の葛藤も今日でおしまい。

ちょっとぴりホツとしている私がいた。

今日の試合もちやつかりみんなと待ち合わせまでしてしまつて、で

も心中ではまだ迷っていたりもする。

ドタキャンしちゃおうかな

つて。でもそんな私の心を見透かしてか、待ち合わせ一時間前に愛からメールが届いた。

「行くよ。」

ただ一言、それだけ。

返事は中々出せなかつた。
風邪をひいた、頭が痛い、おなかの調子が悪くて……

いろいろ断る理由を考えてみたのだけれど、学校の違う今野に会つことはそんなにない訳で。
これ以上好きになつてしまつのは怖かったけど、今野の姿を見てみたい気持ちが勝つてしまつた。
待ち合わせにぎりぎり間に合つ時間に

「行くね」

と愛に返信した。
直ぐに

「待つてるよ」

と返ってきた。

私の返信を待つていてくれたのかもしれない。
愛らしいな、って思つてちょっと嬉しかつた。

慌てて制服を着て学校へ。

土曜日とはいえ学校へいくので他校の生徒以外は制服着用だ。

みんなと校庭へ行くと、試合時間はまだたが、両校の選手はアップの為既にグラウンドで練習していた。

その中に今野の姿を見つける。

我ながらその見つける速さにビックリした。

好きな人というのはこんなにも周りの人と違うのだろうかと。

そのうち麻耶に

「香梨菜どこ見てるのよ。」

と呆れ顔をされてしまつ。

歩美も

「照れてるの？顔赤いんじゃない？」

なんてニヤリと笑う。

愛は事情を知つてゐるせいか、相変わらずにニヤリと笑うだけで。

麻耶と歩美は

「やつぱり神田先輩はめの保養になるねえ」

なんて言つてゐる。

彼氏に聞かれたら大変だなんて思つたりして。

私はやつぱり今野に目が行つてしまつ。

中学を卒業してそんなに経つていいのにこんなに感じが違うものだろうか？

それとも私の見る目が違つてゐるから？

そして、試合が始まった。

驚いた事に今野は1年生だというのに、ピッチに立っていた。
凄いじやん。

始まりから、白熱した試合だった。

ボールは両方のゴール前まで行ったり来たり、でも寸でのところでボールを奪い返して。

私は両手を握り締めながら、ボールの行方を追った。
今野がボールに触る度に、両手の爪が手に食い込む。
そして、もう少しでハーフタイムというその時

「陽人行けーっ」

と一際大きな声がした。

声の方を見るとそこにはあの時の彼女がいた。
彼女は頬を赤くして、一生懸命応援している。
私達の高校の制服を着ているのにそんなことはお構いなしとばかりに。

麻耶もあの人凄いねえなんて言っている。

私は居たたまれなくなつて。

目がちよつとウルつとしてしまつた。

そんな私に愛が気づいた。

「大丈夫？」

と。

「ちょっと田にゴミが入つたみたい。顔洗つてくるね。
と水道へと走つた。

駄目だよまだ、涙でぢや駄目。

自分で自分に言い聞かせ水道へと急いだ。

思いつきり蛇口を捻り顔を洗った。
何度も何度も顔に水を浴びさせて。
動搖した心まで冷やすように。

一緒に帰る

いつの間にかにハーフタイムに入ったようで、水道に向かって歩いてくる足音。

慌ててポケットからハンカチを取り出し顔を拭つた。

泣いている顔を見られたわけではないのに、恥ずかしくなつてハンカチで顔を覆つたまま2歩下がつた。

ちょっとした段差に気がつかずバランスを崩してしまつた。

「「あつ」」

その場に転んでしまうかと思つたのに、私は後ろから誰かに支えられていて。

「「ありがとうございます」」

そう言つてハンカチを下げるとそこには先ほどまでピッチに立つていた神田先輩だった。

「大丈夫？ つてそれより顔を隠したまま後ろに下がるなんてー」と笑いだす先輩。

初めて話しかけられたのはこんな恥ずかしい姿で。違つた意味で涙がでしがつた。

すると

「なにしてるのかな？」

と後ろから声がした。

私は先輩に支えられたままで、慌てて離れて振り向くとそこにはこつこり微笑むあの彼女がいた。

「あつ、違うんです。」

何が違うのかも良く解らなかつたけど一応そんな声を出してみたりして。

彼女は意味深な笑みを浮かべ私の顔をみると、神田先輩に向かって「いいのかな？言つちやおうかなあ」なんていい始めた。

「樹里、ちょっとまつた。俺は転びそうになつた彼女を助けただけで……」

と言いつた見開いた先輩。

私は周囲も見ずに

「すみませんでしたー」

と元いた場所へと駆けてきてしまつた。

何だつたんだ、一体。

ちょっと前だつたら興奮してきつと一週間は寝付けなかつただろう出来事。

先輩と話したうえに、転びそうになつた私を助けてもらひえるなんて。それにはその人、先輩の知り合いだつたんだ。

そりやそうだよね、同じ学校だつたら知り合いの可能性の方が高いよね。

そしてまた、今野と彼女が並んで歩くあの姿を思い出してしまった。
うちの制服を着ながら堂々と他校の生徒を応援する彼女。

樹里先輩かあ。

辞書を思い出して、申し訳ない気持ちになつた。

樹里先輩が私がおまじないしていたことを知るわけないけど、もう一度後ろを振り返つて、ペコリとお辞儀をしてみた。

顔を上げるとそこにはもう一人増えていた。

一人というのは、そう今野。

後ろ姿だけでも直ぐに解っちゃうなんて重症だよ。

心の中で呟いた。

皆のところへ戻るとすかさず麻耶が

「まだ少し目赤いよ。」

と心配そうな顔をしてくれた。

歩美は

「大丈夫、先輩の姿みたらそんなの吹っ飛んじゃうから。」

つて言われてしまつた。

さつきその先輩と話してきたよ、なんて言つたら質問攻めに合ひそ
うだ。

本当は違う人をみているのにね。

そういうしていりううちに後半が始まつた。
先にボールを操つたのはうちの高校だった。

1人かわし2人かわし、後半が始まつて間もないのにどんどんゴー
ルへと近づいていく。

そして、ゴール間近のサイドで、神田先輩にボールが渡つた。こちら側からの応援の声がより一層高まって、凄い声になった。
あちらこちらから

「神田ー」「神田先輩ー」

などの声が飛んでいた。

私の隣の麻耶たちも例外ではない。

「あんた何ボヤつとしてるの、早く応援しなさいー！」
つて突っ込まれた。

でも出来ないよ。

だって、今日の前では必死にボールを奪い返そうと、神田先輩に今野がついてる所だったから。

心の中では誰にも負けない声で今野に声援を送つていたのだから。

息を呑む展開というのにはいつもこうなことをこうのだろう。
先輩も今野も一歩も譲らず、ボールに食らいついている。

そして、一瞬の隙をついて、神田先輩が前へ出た。
あつという間の出来事だった。

そして、そのままショートを決めた。

ワアーッと歎声が湧き上がり、手を叩く周りのみんな。
でも私は、手を叩くこともせずに今野を追っていた。

今野は一瞬膝をついて、頃垂れたが直ぐに立ち上がり、自分の定位
置へと戻つていった。

こんなに真剣な顔をしている今野は初めてみた。
格好よかつた。

一秒一秒、時間が経つ程に今野の事が好きになってしまった私がいた。
もつひとつもない位に。

結局試合は1・0のままうちの高校が勝った。

試合が終わってもみんなの興奮は冷め遣らず

「やっぱり、神田先輩はかつこいいね。
」

なんて、先輩の話でもちきりだった。

そんな中、歩美が

「でもさあ、あの神田先輩に引っ付いてた15番もかつこよくなか
つた?」

といい始めた。

麻耶も

「やっぱり、私もちょっと思った。今度チェックいれちゃ おうかな
ー
つて。

15番、今野のことだ。

愛だけは解つてこなから、困ったような顔をして私を見ている。

麻耶は

「でも香梨菜は先輩だけを見てればいいんだからね
私はまた言つタイミングを逃してしまつたみたいだつた。

そして、みんなで校門の前までくると突然麻耶が声をあげた。

「ねえ、ねえ、あれ15番じゃない?誰か待ってるのかな?」

相手チームはつぐくに解散していた。

きつと樹里先輩を待つていてるんだね。私はそんな場面を見たくないのと足早に通りすがりとしたその時。

「よひ

と今野が口を開いた。

「お疲れ、残念だったね」と返した。

話掛けないで、樹里先輩が来るまでのつなぎなんて耐えられないか

ら。

そう思つていたのに、今野はまた話掛けてくる。

「お前、もう帰るの？」

と。

隣で麻耶たちが知り合いなの？と興味深深の顔でこちらをみている。もう限界。

「じゃあ、またね」と行こうとしたら、

「一緒に帰るわ。」

と言われた。

一緒に帰ろうぜ？まさか樹里先輩と3人で？

「冗談じゃない。

これ以上私、落ちたくないから。

そう思つたのに

「じゃあ、また宜しくねー」

と愛が麻耶たちを引っ張つて行ってしまった。

愛一つ、なんて事を。

しぶしぶ、今野の顔を見ると、ポリポリと頭を搔きながら

「行こうぜ。」

と私の前を歩き始めた。

2人で？樹里先輩は？

そうは思ったものの、周りには私しかいなくて。

急に鼓動がせわしくなる中、私は今野の背中を追いかけた。

告白？！

私は違う大きな背中をみながら歩き始めた。何か話せばいいのに何も浮かんでこない。

すると今野が私の方を向いて

「浅田つて歩くの嫌い？」

と聞いてきた。

「嫌いじゃないよ」と答えると

「じゃあ、天気がいいから、歩いて帰らない？」と言つてきた。

別に歩くのは嫌いじゃないけど、ここから家までどれだけかかるのだろう？

それに会話が続くかどうか……

私が不安そうな顔をしていたのに気がついたのか

「やつぱりバスで帰るか。」

と言つて直した今野。

ちょっとした微笑にも反応してしまった私。

きっとこんなに長く話せるのも最後かもしれない。

そう思った私は

「いいよ、天気もいいし歩いて帰るつか！」と返事をした。

今野は一度フツーと息を吐くと
「おつ」
と返してきた。

そして暫しの沈黙。

さつきと違うのは私は今野の後ろではなく、隣を歩いている。

それだけでも、嬉しく思つてしまつただけど、家に着いたら泣いてしまうかもなんて、マイナス思考に囚われてしまう。

「この辺変わらなによなあ」

「やうだね」

こんな調子で取り留めのない会話が続いている。
どことなくぎこちない会話。

私といえば、この前バスの中からみたこの道。
こんな風に今野と歩く樹里先輩のことを考えずにはいられなかつた。
あの時と同じように私達の横をバスが通り過ぎた。

「お前わあ。

今野は前を向いたまま話出した。

「ん?」

「お前も、おまじないしてたんだる。」

唐突な話に心臓が止まるかと思つた。

もしかして、私が今野のイニシャル書いたの知つてるの? 彼女との仲を裂こうとしてるって非難されちゃうの?

後から考えたら、そんなことばれる訳がないのに、動転してしまつて私の頭はパニック状態。

今野はそんな私におかまいなく話を続けた。

「俺、従兄弟がお前の高校についておまじないの話聞いてたんだ。あの時4葉探してたんだろ。」

優しく語りかける今野に思わず頷いていた。

「上手くいきそうなのか？」

なんでこんな事今野にきかれなきゃいけないだろ。うう。

泣きそうだった。

でも必死で涙を堪えて

「駄目かなあ。私、好きになちゃいけない人好きになっちゃったから……」

「好きになっちゃ駄目な人なんているのか？」

だから、あんたなんだって。

言つてしまいたい衝動に駆られる。

ぐつと堪えて

「私の好きな人ね、とつても仲の良い彼女がいるの、私の入る隙間なんてこれっぽっちもなくて。」
涙が零れないように上を向いた。

「そんなん好きなんだ。」

今野が言った。

「うん、好きになっちゃった。」

誤魔化すようにペロリッと舌をだしておじけてみる。

「そんなに、好きなんだ。」

もう一度今野が呟いた。

「うそ。」

「諦められない？」

と聞く今野、だからあんたの事なのに。

この会話を一刻も早く終わらせたかった。
どうせこれが、今野と話せる最後だつたらむつと楽しい話をしたか
つたから。

「そんなことより今日の試合惜しかったね。凄いじゃん、1年でレ
ギュラーだなんて、それもスタメンなんだもん。びっくりしちゃつ
たよ。」

本当はかつこ良かつたよ、って言いたかったけど。

私はさつきの今野の姿を思い浮かべてちょっとトロシップしてしまつ
た。

「そんなことよつて、お前。」

折角話をえたのにまた蒸し返すとしているのか今野は私に問
い直す。

「もしかして、お前の好きな奴ってサッカー部なのか？だから今日
見にきたのか？」

少し険しい顔をして核心を突いてきた。

だから、あんたを見にきたんだってば。

喉から出でしきそつになる言葉をグツツと飲み込んだ。

「やうなのか？もしかして。」

そう言つたきり口を噤む今野。

もしかして、ばれちゃつた？

今まで以上にドキドキしてきて、何とか話しうを逸らさなくちや。

「それより、彼女はどうしたのよ。私と一緒に帰つて大丈夫なの？
私恨まれるのは勘弁だから。」

また自分で言つて惨めになつてくる。

「そんないねえよ。」

一際大きな声で今野が叫んだ。
「いなつて？だつてさつと居たじやん。
まさか他にもいるとか？
頭が混乱してきた。

「いなつて、今野私に言つたじやない、彼女がいるつて。
こなりやヤケだ。
思つたことを口にした。

「あ、あれは……」

さつきの勢いはどこへやら今野の声は小さくなつて。
そして、一息したあと。

「弘樹なのか？お前の好きな奴つて。諦められないのか？」
今野はそう言つた。
弘樹つて呼び捨て？

私は一瞬戸惑つて返事を出来なかつた。

それよりさつきの彼女いない発言が気になつてしまつた。

大分歩いていたみたい。

辺りは見知つた風景で、私の家は目前だつた。

最後でいいや、言つてすつきりして振られちゃえ。

大きく息を吸い込み

「今野が好きなの。」

「俺にしとけよ。」

2人の声が重なつた。

？？？

何て言つた？今野の顔を見ると向こうもきょとんとしている。私は、立ち止まり今野を見つめてしまつた。

好きになつてもいいの？

私も今野も無言だつた。

2人とも頭の中を整理しているかのようだ。

そして、今野が口を開いた。

「俺が好き？」

俺が好きって。

私が聞きたい

俺にしとけ

つてどういう事？

私は訳解らなくつて。

だつて、彼女がいるつて言つたのは他でもない今野だし、この前みた樹里先輩との2ショットは？仮にも先輩じゃないとしてもあんな風に彼女以外とも話すもんなのだろうか？他の子にもあんな風に話しかけているの？

おまけに俺にしとけつて。

これを理解できる人がどれだけいるのだか。

頭の中を整理するのに精一杯で私は今野の問いに応える余裕なんてこれっぽっちもなかつた。

「浅田。」

私の名を呼び再び答えを促す今野。
私は疑問の一つを投げかけてみた。

「樹里先輩は？樹里先輩が彼女なんぢゃないの？」

すると今野は

「どこからそんな発想が出てくるんだ。樹里は従姉妹だよ。俺の母さん3姉妹なんだ。母方の従姉妹。」

そうだつたんだ。
じゃあ彼女つて？

「じゃあ、彼女は他にいるの？」
次の疑問を投げかける。

今野は困つたように顔を顰めた。

「駄目だつたんだ。
ぽつりと呟く今野。

駄目つて何が？振られちゃつたとか？

呆気に取られる私を尻目に今野はゆっくりと話だした。

「ずっと、好きだつたんだ。高校が違えば忘れられるつてそう思つてたんだ。勝手な話だけど俺にはその頃彼女がいて、彼女に言われるがままに付き合つていたんだけど……」
切なそうな顔をして上を向いた。

誰を想つてそんな顔をするんだろう、胸が苦しい。

「付き合つていいくつちに、そいつのこと好きになるつて思つていたんだけど、俺の目はいつも違う方を向いていた。時間が経てば忘れるなんて嘘だよ。時間が経てば経つほど気になつてしまふがないんだ。あいつはそんな俺に気がついて、別れたんだ。高校に入つ

てからは誰とも付き合っていないんだ。」

今野の顔は上を向いたままでその表情はみれなかつた。
だけど次の瞬間私の顔を見て

「この前偶然会つたんだ、一目で解つたよ例え後姿だろ? が迷いもなくな。だから駄目だつたんだよ忘れるなんて。」

そこまで聞いても核心に迫れない。

誰に会つたの? 元カノ? それとも……

「浅田だよ。お前に会つたんだ。」

私は

「だつて、あの時彼女がいるつて、忘れてくれつて言つたじやない。」

「と叫んでしまつた。

「あの時、俺、思わずお前が好きだつて言つたじになつて。慌てて初恋だなんて言つちやたんだ。さつきも言つたように知つてたんだ、お前の高校に恋のおまじない。直ぐにピンときたよお前が4葉のクローバー探してゐつて事。それつて好きな奴がいるつてことだろ? 言えるかよそんな奴に。だから、自分自身にブレークをかけたんだ。そうでないと言つてしまいそうだつたから。それに辺に気を回されて次に会つた時に避けられでもしたら立ち直れないと思つて。」
自分勝手だよな最後にぽつりとそう呟いた。

「私、好きになつてもいいの?
今野を好きでいいの?」

心中の中で思つたことが口に出でいたらしく。

次の瞬間凄い力で引き寄せられた。
すっぽり埋まつてしまつ私の身体。

好きでいてくれ

今野は私の頭に顔を近づけ振るえる声でそう言った。

私の背中に回る今野の腕。

私の顔はぴつたりと今野の胸にあわまつて、今野の心臓の音がはつきり聞こえる。

歩いたせいなのか、それとも私と同じ理由だろうかその音は私といい勝負。

思わずおろしていた手を今野の背中に回してしまった。

全身が一気に熱くなつたのが解る、わつと顔は真つ赤だ。

その時急に場違いなメロディが、今野の携帯だ。

咄嗟に今野の背中から手を引いた。

今野は無視をしようとしていたのだろうけど一向に鳴り止まず、

今野は”ちつ”と舌打ちすると私の背中から手を外し携帯を耳に当てる。

「後で掛ける。」

そう一言だけこうと電源を落としてポケットにしまつた。

照れくさくて顔を見れなかつた。

そして、はつと気がつく。

夢中で話をしていたから気にもしなかつたけど、ここは道路の真ん中で。

家への距離わずか50メートル。

慌てて辺りを見渡して知ってる人がいないか確認する。

今は…大丈夫だね。

恥ずかしさがピークに達して慌てて会話をしようと

「携帯大丈夫だったの？」

と聞くと

「弘樹だつたから。」

という今野。

「弘樹つて、神田先輩？」

知り合いなんだね。それも携帯の番号を知っている。

「従兄弟なんだ、母方の。弘樹に樹里に俺。兄弟みたいに育つたら。

そういって微笑む今野。

そつか、そだつたんだ。
みんな親戚だつたんだ。

だからあんな風に自然な感じだつたんだ。
一人納得してみる。

もう少し、もう少しだけ話がしたい。

今野のジャージを引つ張つて、近くの公園へ行かない?と誘つた。
それだけでも凄い勇気だつた。

はじまつは公園で

私は今、今野と2人並んで公園のベンチに座っている。自分で公園に行かない？なんて誘つた癖にこの後の事を全く考えていなかつた。

ちょっとこの際頭の中を整理しよう。

私は今野が好きだと言つてしまつた。

今野は私に俺にしろと言つて、私が好きだといつてくれた。

樹里先輩と神田先輩は従兄弟で

それで…

黙つて座つてゐるこの状況は？
もしかして私から付き合つてくださいこと言わなくちゃいけないといふことなのだろうか？

思わず今野の顔を見つめてしまつた。
彼は顔を背けてしまつて。

一体この状況どうすればいいんだろう。
もう少し話がしたい。

本当は聞きたい事は山ほどある。
よーしここまできたら同じだよね。
心の中で気合を入れて

「あのね、私。」

そこまで言つて一度呼吸を整えた。

今野は私を見て一度ゆっくりと頷いた。

「私、クローバーにね。KとHつて書いたんだ。」
伝わりますよ!」

そう、思つてちらつと今野の顔を見上げた。

彼は少し苦しそうな顔をした。

そして

「やつぱり。弘樹の事…」
そう言つて黙つてしまつた。

うわっ。

忘れてたよ、自分で気がついてたのに。
思いつきり勘違いしている今野の袖を引っ張つた。

「違うよ。私が書いたのは 今野のKと陽人のHだったんだよ。」
思いがけず大きな声になつてしまつた。
でも今野はまだ曇つた顔のまま。

「だつて、あの時お前、気がついてなかつたつて… そう言つたじや
ないか。」

私の声とは対称的に咳きともれる小さな声だつた。

そんな今野の顔を見ていられなくなつて、恥ずかしいけど、恥ずか
しかつたけど。

「だから、あの時の今野の笑つた顔が頭から離れなくて。目を瞑つ
ても浮かんではくるのは今野の顔だつた。神田先輩に話しかけられた
つてドキドキしなかつたの。私が 私が試合で目を追つていたのは

今野だけだった。今野にしかドキドキしなかつたんだから。「言つてしまつた。

女は度胸とは言つたものだ、でも恥ずかしすぎて顔を上げられない。今野の足だけが目に入った。そして、今野は黙つたまま。

どれくらいの沈黙があつたのだろう。

さつきとは違つた意味のドキドキで私の心臓が加速する。

「凄い情けないんだけど。俺にしどけなんて言つておいて、今更だけどまだ信じられないんだけど。勘違いじゃねえよな。」

さつきが今野に私は頷いた。

「ウオッシャー！」

さつきが突然立ち上がつた今野。私はただただビックリして。

そうしてまた私はいつの間にか再び今野の腕の中にいた。

「大事にするから、一緒にいて欲しい。」

今さつきの雄たけびとは全く違つ静かな声だった。

「それって」

そこまで言つた私の声は今野の声で遮られた。

「付き合つて。俺の彼女になつて欲しい。」

私は言葉より先に今野の広い背中に手を回した。そして

「嬉しい。嬉しいよ今野。」

そこまで言つと

タツタラツタ

と聞える携帯の音。

言わずと知れたルパンのテーマ。

私の携帯だった。

2人で顔を見合させて笑った。

「でなくていいの？」

という今野に

「大丈夫。メールだから。」

と携帯を取り出して開いて見せた。

解っている、この着信は麻耶たちだ。
2人で画面を覗いてみるとそこには

「ちゃんと報告してね」

という文字と3人でケーキを頬張る姿が添付されていた。

「了解

と短く返事を打ち今野に向き直る。

「今度紹介していい？」
と聞いてみた。

「彼氏としてなら。」

そう言いながら今野はあの顔をした。

あの公園で見たとびつきりの笑顔だった。

それから、私たちはナンバーとメールアドを交換して。
とりあえず今日はこの辺でと帰ってきた。

ふわふわした気持ちで自分の部屋に入る。

さつきの今野じゃないけど急展開に信じられない気持ちの方が大き
かつたりして。

携帯を開いて

今野陽人

という名前を確認してしまった。

自然と笑っている自分がいた。

そして、机の中からそっと英語の辞書を取り出した。

531ページ

小さいけれどそれはしつかりその間に挟まつていて。
思わずこみ上げてくるのもが。

ありがとう

小さな声で4葉にお礼を言つてみた。

一夜明けて

「香梨菜～遅刻するわよ～」

ん～つ

軽い伸びをして田覚まし時計を手に取る。
いつもだったら、朝食を食べている時間だった。
あんなことがあって誰が寝れるというのだ。
全くといっていいほど寝付けなかつた私。
いつのまにか寝ていたけれど……

また思い出しちゃつたらドキドキが再発してしまつた。
かなりの重傷だ。

ふと携帯をみると着信ランプの点滅が！
片手で胸を押さえ携帯を手に取る。

開いてみるとそこには

今野陽人

の文字が。

メールの着信だつた。

時間は今から30分前で

「おはようーこれから朝練だー。昨日の試合で負けたからみんな気
合入つて大変だよ」

と書いてあつた。

私は着替えるのも忘れ携帯と睨めつこ。
はて、何を書こいつ。

暫し考えたのだけじ結局

「おはよーー一部活頑張つてね。ファイトーー。」
とだけ送つてみた。

昨日の晩、麻耶たちにはメールを送つておいた。
直ぐにみんなから返信がきてそれがまた恥ずかしいのなんのつて。
改めて余韻に浸つてしまつた。

「香梨菜～」

下からお母さんの声が段々近づいてくる。

トントンと2回ノックした後にお母さんが顔を出した。

「あら、まだ寝てゐるかと思つたわよ。本当に遅刻するわよ、早く
着替えて食べちゃいなさい。」

「はーい」

私の返事を確認した後、忙しそうに階段をパタパタと下りていつた。
顔が赤いのはれてなかつたかな?
ちょっと心配したけれど、そんなことを言つてゐる場合ぢやない、
着替え着替つと。
顔を洗いキッチンへと急ぐ。

キッチンのテーブルの上には食べやすそうなおにぎりが一つ置いて
あつた。

「時間がなくともそれだけは食べけやこなさこよ。」

お母さんの声に頷き、いただきまますとおにぎりとおにぎりにおにぎりにかぶ
りついた。

テレビを横田で見ながら、お茶と共におにぎりをたべりながら、

歯磨きをして、こやか出発ー

きつと質問攻めにあうんだろうな。

バスに揺られながら、そのことを想像して身震いしてしまった。

行きたくないかななんて思つたりもしたのだけ、この前のする休みもあるしな。

そうこう考えていたら下駄箱の前だつた。

いつもより2本遅いバスだつたのでいつもの光景とは違うものだつた。

丁度朝練を終えた運動部の面々が靴を履き替えているところだつたのだ。

そこにはサッカー部もいたわけでして。

学校が違うのだからいるわけがないのに、この集団の中から現れる今野の姿を想像してしう自分。

相当重傷だ。

「浅田さんおはよう。」

声をかけられ振り向くと、そこには爽やかな笑顔の先輩がいた。

「お・おはよう」ぞいいます。」

突然の神田先輩の登場にあたふたしてしまつた。とりあえず声がでたのは良かつたのだけれども、目の前にはにこやかに微笑む先輩。

????どうして私の名前を知つているんだ?

私の顔を見ていたらうつ先輩は
「うん、陽人の言つてるのが解る気がするよ。
となにやら納得した様子で。

陽人つて。

今更ながらに従兄弟だったことを思い出す。

それにしても今野は私の事なんていつたんだろ？

そつちのほうが気になった。

そのまま固まっていた私に先輩は

「そんなに立つてると遅刻するぞ！」
と一聲掛けサッカー部の人達に紛れていった。

いけない！私も急がなくちゃ。

チャイムと同時に席に着いた。

あちら→ちらから視線を感じるのは氣のせいじゃないだろ？

恐る恐る愛のほうを見ると案の定軽い笑みを浮かべこむりをみていた。
きっと、麻耶たちもだろ？

また今野のサッカーしている姿みたいな

などと浮かれていて授業なんて上の空。

チャイムが鳴つたことさえ気がつかなかつたくらいだ。

「なーに？もう幸せボケですか？」

麻耶に頭を小突かれる。

「そんなんじや……」

当たつているかもと思いつつそんな返事を返してみたり。

「ほりほり、そんないじめないでよ。」

そう言つてくれるのはやつぱり愛だつたりするんだよね。
なのに今日の会いは一味違つた

「それで、私も実は興味あるんだよね。昨日のその後に。」
愛つてば、今日は味方じやないのね。

「それでそれで！」

そんなことをいわれ思わず思い出してしまった今野の腕の中。
顔が沸騰してしまった。

きっと頭の先から湯気でも出でているんじゃないかなって程。
「なに、思い出してるのよ。何だかエッチだね香梨菜つて。」

「早く聞かせて」

一度深呼吸して呼吸を整えると、より一層3人の顔が近づいてきた。
一瞬のけぞつてしまつた私。
だつて凄く恐いんだもん……。

「あのね、えーっと……」

何から話せばいいのだか詰まつてしまつたその時に

「浅田ーつ。お前神田先輩と知り合つたのか？」
教室中に響き渡るその声。
サッカー部の山城だつた。

山城の声にクラスの面々が反応して興味津々の目が私に集中してしまつた。
「な、なんで？」

私の方が聞いてしまつた。

「いやー、今日の朝練の後にお前の事聞いてきたからさ。あの神田

先輩に話し掛けられて緊張しちゃつたよ。」

彼には何の悪気もないのだろうが、さつきから周りの女の子の視線の痛いことつたらない。

「知り合いの親戚だつたみたくて、それでかな？」

あえて彼氏とは言わなかつたけれど、私の答えに山城も周りの女の子も少しあ納得してくれたみたいで、山城は

「そりなんだ。」

といつて何処かに行つてしまつた。

ふつと一息入れると、田の前にはまだ難関が。

「聞いてないんだけれど。」

少し低い声で麻耶に突つ込まれる。

「だから、それをさつき言おうとしてたんだけどね。
ごまかし半分舌を出しあおじけてみせた。」

それから少しの間、無言のプレッシャーが続いていまして。

「今野つて神田先輩の従兄弟だつたんだよ。それが解つたのは昨日の事で実をいうと私もまだ信じられない状況です」

「へーそれはまた随分と世間は狭いもんだね。」

感心したように3人は頷きあつていた。

「本当だね、私が一番思つてます。」

山城の乱入があつたせいで休み時間はあつという間に過ぎてしまつて話の続きはまた後でとみんな席に戻つていつた。

何でこんなに緊張しなくちゃいけないのだから
憂鬱だ。

「なるほどねえ」「やけに気になる言いかたじゃないですか。歩美はニヤついた笑いを浮かべ

「本当にそれだけなの？ 実はもう一

その探る視線はなんなのでしょう麻耶さん。

愛に至つては瞳が語るところのじょうつか……

私は「ごーへ居心地悪いんですけど。

今は昼休み真っ最中の屋上だつたりする。

お弁当を広げながら、今日何度目かになるだらうみんな会話。
でもまあこれで麻耶や歩美に対しての隠し事も憂鬱な気持ちもやわ
らいだからそれで良かったのかもな。

「またあんたトリップしているの？ いいねー初々しくて！」

そんな言葉ももう何度目なのか。

だからあんた達事考えていたんだつてば！

心の中で反論した。

その時場違いな音楽が

私の携帯だった。この音楽は今野からのメールだ。
私はポケットに手を伸ばしそつと携帯をさぐる。

途端に3人の顔が近づいてきた。

「遠慮しなくていいんだよ。見ればいいじゃん。」

「う・うん

思わずもつてしまふ私。

これじゃあ既に思つ壺だと思いつつも、メールが気になる私。
後ろを向きつつ携帯を開いた。

「今日帰り暇?」

それだけ書いてあつた。

暇といえば暇なんだけど。

取りあえず

「暇だよ」

浮こづがそつけなければこづちもそつけない。

用件だけを返信してしまつた。

それを盗み見ていた麻耶に

「あんた達熟年夫婦みたいだね。 とても付き合いたての2人には見えないつて。」

「そうそ、私達だつてそんなそつけないメールしないつて。 つて
いうかそんなメールした日には大ケンカ確実よ。」

と歩美に呆れられてしまつた。

そして、ちょっと貸しなさいという麻耶にあつと、う間に携帯を取り上げられて、何やらボタンを押し始める麻耶。

ちょっと止めてつてば！

大きな声を出すも、もう遅し。

帰ってきた携帯にはそれはそれは大量のハートマークと

何処かに行くの？嬉しいよ。

の文字が。

顔面蒼白だ。

隣で”ちょっとやりすぎだよ”と愛の声がした。すると直ぐにまた着信音。

思わずビクッとしてしまった。

携帯をあけてみるとそこには

これまた画面いっぱいのハートマーク――。

そして

俺も嬉しい。行く場所は秘密だよ。

の文字が。

どうしちゃったの今野？！

その謎は直ぐに掛かってきた携帯で解けることになる。

「俺……。今の無理やり友達が送っちゃってその

言葉に詰まってしまう今野。

私は今野の言葉を遮り

「私もおんなじだよ。友達がね、送ってくれたの。でも誘ってくれて嬉しいのは本当だよ。」

小さい声だけどう今野に伝えた。

今野との会話は放課後の待ち合わせ時間と場所を決めて終わった。

甘い雰囲気も何も無く、でもそれは聞き耳立ててこの人達がいるせいなわけで。

きっと向こうも同じだと思つ。

6つの目が私を凝視していた。

「もう！恥ずかしいじゃない。」

私は、本当に恥ずかしくって、その場を立ち上がり、教室へと走ってしまった。

待ち合わせかー。

誰もいない場所について改めてにやけてしまつ私だった。

そして放課後。

何とか3人を振り切つて待ち合わせの場所にきてみると、既に今野が待つていたのだった。

「待つた？」 そう言つた私に今野はあの笑顔で

「今来たところだよ。」
と返してくれた。

じゃあ行こうかと歩き出す今野の後ろを着いて行く。
大きな背中を見つめているとふと立ち止まつた。

そして、右手を差し出した今野。

私はためらうことなくその手を取つた。

大きくてあつたかい今野の手。

少し緊張してくれたのだろうか。

しっかりと握り締められたその手は、私の手と同様、少し汗ばんで
いるようだった。

そんなことも嬉しくつて。

暫く歩くと、一瞬手を緩め私の手を握り直した。
指と指が絡まつた、所謂恋人つなぎ。

今野が彼氏になつた事を実感した瞬間だつた。

大きな今野の手に私の手が包まれて。

まるで手が別の生き物のようにドクドクしているみたいだった。
緊張してしまっているせいか中々言葉が出てこない。

2人で黙々と歩いているこの状況つてどうなのがしら?
でも不思議と嫌な感じはしなくて。

半歩先行く今野に引っ張られているみたいについて行く。
地元だから良く知っているつもりだつたけれど、表通りから一本入
つたこの道は通つたことがなくてきょろきょろしてしまつ。
そんな私に今野は笑いながら

「大丈夫、変なところに連れ込むわけじゃないから。
と言つたのだけれど、私はその言葉に身構えてしまつて、踏み出す
足が小幅になつてしまつた。

連れ込むつてー

「浅田?」

優しい声に反応してしまつ私の顔。

「何でもないよ。」

そう言つたのだけれどさつきの連れ込む発言が私の頭の中をぐるり
と回つてしまつていい訳でして。いらぬ想像をしてしまつた。
さきつとこの前のことがあるからなんだろう。

嫌な事なんてない、反対に……

いけない、いけない。そつは思つたのだけれど、とことん変な方向に

行ってしまう私の頭の中。

何か違う事を考えなくちゃ。

そうだ、会話会話。

何か話せば大丈夫、とは思いつつも何を話せばいいのか分からぬんだよね。

すると、今野方から話掛けてくれた。

「中学の時はさ、『うやつて手を繋げるだなんて思わなかつたよ。ふざけて笑いあつて、お前直ぐムキになつてからかわれた奴の背中とか叩きにいつただろ、勿論俺もそんな一人だつたけど、お前が他の奴追いかけていくと目で追つて、止める一つて念力送つたりしてた。つて何いつてるんだか俺。』

私にとつたら爆弾発言だからそれ。
私の顔で水が沸騰するかもしれない。
それ位顔が熱くて……。

「言つてくれればよかつたのに。」
と思わず呟いてしまつた私。

途端に握つた手がぎゅつとなつて。

ちらつと今野の顔を覗いてみると今野は上を見上げていて、顔は見えなかつたんだけど、耳が真つ赤で。

それを見ている私も負けじと真つ赤なわけで。
それ違う人がいなくて本当に良かつたかも。

そして、また沈黙が始まつてしまつた。

中学の頃はぽんぽん言い合つていた仲なのにね。

「あそこだから。」

の声に田に向けるとそこには可愛いお花に囲まれた一軒の喫茶店？

初めて見る所だった。

こんな近くに可愛いお店があるなんて、驚きだよ。

まだ新しいらしく、ベージュ色の壁には少しだけ薦がはっていた。お店の周りは色々の可愛いお花がめぐらせてあり、厚みのありやうな深いレジンのドアには金色の鐘が付いていた。

今野君は迷う事なくそのドアを開けた。

同時に澄んだ音色の鐘の音がした。今野とはちょっとスマッチかもと思ったのは言えないね。

一步足を踏み入れると、木の香りがふわーと広がった。そして、次に香ばしいコーヒーの香り。一瞬で虜になってしまった。

店内を見渡すと

「いらっしゃい。待つてたわよ。」
とてつこり微笑む樹里先輩がいた。

言葉が出ずに大きく頷く。

「連れてきてとは言つたけれど、ここまで見せ付けてくれるとは思わなかつたわ。」
と。

田線を辿ると、私達のじつかり繋がれた手だった。
慌てて手を離した。

「あららら。余計な事言つちゃつたかしら。
そつ言つ樹里先輩に大きく手を振つて

「そんな事ないですから。」と口籠つてしまつた。

じゃあこちらへどうぞ。

と部屋の角にあるテーブルに案内された。

「ブレンドな。浅田はどうする?」

ここに来て初めて今野が口を開いた。

同じものがいいかなと思つたのだけど、目に入つてしまつたあの文字が。

「カフェオレお願いします。」

私が注文すると、樹里先輩はにっこり笑つて”お勧めよ”と言つた
後にカウンターに向かつて

「ブレンド一つに、カフェオレ二つです。」

カフェオレ?と思つまもなくはじめからそのつもりでいたのだろう、当たり前のように私の隣に座つたのだった。

私は緊張して、田の前のテーブルに視線を落とした。

あつ

重厚な感じの深いこげ茶色のテーブルには透明なテーブルクロスが
かけてあつて。

その真ん中には、落着いた色の和紙、そして その和紙にちよこ
んと置かれた4葉のクローバー。

隣のテーブルにも後ろのテーブルにも大きいものや小さいものなど

大きさは様々だったが、やっぱり4葉のクローバーがあつたのだった。

素敵

思わず口から言葉が漏れた。

「気が付いてくれたんだね。」

樹里先輩は「機嫌なようだった。

今まで黙っていた今野君が口を開いた。

「JJIJは俺達の祖母の家があつたんだ。喫茶店を開くのが夢だったんだって言つて。思い切つて喫茶店に改築してしまつたんだ。」

ここにおばあさんの家があつたんだ。
結構近くなのに知らなかつたな。

「やうそれで、今あそこのかウンターにいるのが私の母で、一応ここのおーナーなの。」

見ると、樹里先輩によく似た素敵な女性がサイフォンを暖めていた。すると目が合つてしまつて、慌ててお辞儀をした。

樹里先輩のお母さんは柔らかな笑みを浮かべてお辞儀をしてくれた。

そして、さつきの一言が気になった。

「一応つて?」

何となく樹里先輩ではなく今野を見てしまつた私。

「じゃんけんだつたから。」

ぽつりと今野が呟いた。

「そうじゃんけん。だからみんな分かっているけどすねちゃってね。特に陽人のおばさんなんて、もう一度とグーは出さないって凄かつたわよね。」

「わうだつたな。でも家ではけろつとしてたけどな。」

「そうだつたの？それは初耳だよ。」

と樹里先輩が怪しげな顔をする。

ほんの少しだけど、今野の周りの話が聞けて嬉しくなつてしまつ私がいた。

カラソと鐘のが響いた。

スポーツバックを片手に入つてきたのは神田先輩だった。
その姿を見ていたら、急に今野が立ち上がつた。

帰つちやうのだろうか？と私も立ち上がりつとすると、先に樹里先輩が立ち上がつた。

「ハイハイ、分かつてますつて。」そつといつて今野の座つていた席へ。

今野は私の隣の席に。

「よう、丁度、席替えタイムだつた？」

樹里先輩と田配せる神田先輩は確信犯だらう。

「煩いつて。」

そういう今野は照れているようだつた。

「今にちばは浅田さん。何か浅田さんって呼び辛いな。香梨菜ちやんでいいかな。」

「これぞ必殺スマイル。」

「はい。」

と返事をした。

ちょっと前まではこのスマイルに何度もやられてしまつたか。でも不思議、こんなに近くで神田先輩が私に微笑んでんくれているのにあの頃のときめきは全く感じなくなつていいのだから。格好いいとは勿論思うけれどね。

つて私、一瞬でこんな事を考えてしまつた。

テーブル下では今野の手が私の手を握り締めていた。

憧れと好きの違い

神田先輩は話してみたら、とっても面白い人で何度も大きな口を開けてしまったかわからぬ位だつた。

ただかつこいいだけじゃなかつた事に改めて凄いと思いつつも、いかに表面だけしかみていなかつたのだと思い知らされた感じがしてしまつた。

それにしても……さつきから今野の手は繋がれたままで、私が笑う度にその手が一層強く握られた。

カウンターから樹里先輩を呼ぶ声がした。

だけど、立ち上がつたのは神田先輩。

手で樹里先輩を座つていろよと言つ風に促しカウンターに向かつた。

その時の樹里先輩の顔を見ていたら何となく状況が読めてきた。
そつから、そつだよね。

こんな綺麗な樹里先輩に彼氏がないのは、きっと直ぐ近くに神田先輩がいるからなのだろう。きっと神田先輩だつてそうに違ひない。それは私の直感だつた。

今野は知つているのかな。

ちらりと見る今野の顔は無表情だつた。
その顔をみた途端にざわつく私の心臓。

怒つてるのかな

思わずそう思つてしまつた。

自然と目が繋がれた手に向いていた。
しつかり握られた手に少しだけ安心するけども……

おませ

そう言つて神田先輩がコーヒーとカフェオレを運んできてくれた。これはおまけだよ、とプチケーキまで。

ありがとうございます。

とお礼を言つた。

先輩も席に着いたので早速カフェオレを飲もうとカップを持った。片手だけで持つのはと思い、今野の顔を見て、繋がれた手をちょっと引いてみた。

あつたりと解かれてしまった手。

自分から引いたにも関わらず、寂しく思つてしまつた。

本当はさつきから気がついている。

今野が声を出していないことに。

それに気がついてからは、神田先輩の話しもすんなりと頭に入っこなくて。

さつきまであんなに笑つていた自分は何処かにいつてしまつたみたいだつた。

カフェオレに口をつけてみた。

程よいコーヒーの苦味とミルクの甘みが絶妙だつた。

フォークでケーキをつまんで口に入れるとほんのりブランデーの香りがした。

あつさりとしたこのケーキはもつと食べたくなるよつた、ほっぺが落ちてしまいそくなくらい美味しいものだつた。

大好きなカフェオレに美味しいケーキ。

嬉しくないはずなのに。

隣にいる今野のことが気になってしまって、ちょっと泣きたくなつてきた。

「どうした？ 香梨菜ちゃん。 美味しくなかつたのか？」
神田先輩の声にはつとした。

そつが、そつかもしれない。
うぬぼれてるかもしれないけれど、きっとそつだ。
だつて、先輩がくるまでは今野普通だつたし。

「いいえ、先輩。 とつても美味しかつたです。 また来てもいいですか？ もしかしたら一人でも来ちゃうかも。」

「絶対」
「よな。 香梨菜ちゃんだつたらいつでも大歓迎だよ。」

先輩がそつ言つてくれたといひで私は立ち上がつた。

「本当に美味しかつたです。 これから私ちよつと出掛けたいといひ
があるので失礼しますね。」

今野はびっくりしたみたいでやつと私の顔を見てくれた。

「行こ」
「う、陽人。」

かなりドキドキしながら初めて名前を呼んでみた。
樹里先輩が小さくガツツポーズをしたのが見えた。
もしかしたら、よそよそしい私達に一石投じてくれたのかもしれないと
いなんて思つたりして。
だつて、何回も呼ばなくていいといひまで私の名前を呼んでいた
から。

今野はとい「うと。

耳まで真っ赤になつて、そっぽを向いていた。
でも横顔はまんざらでもない顔だよね。

私は先輩達の前だといつのに大きな今野の手を取つて歩き出した。
カウンターの前では樹里先輩のお母さんが満面の笑みで見送つてくれた。

繋がれた手が熱い。

今野も暖かいけれど、私のそれとは比較に成らないほど。
神田先輩とは話していくて楽しいけれど、エキドキはしないんだ。
今野の表情一つで私の心は激しいほど上下してしまつ。
これが、憧れと好きの違いかもしねり。
今野のことと頭がいっぱいになつてしまつ、もうどうじょうもないほど。

4葉のクローバー

喫茶店から私の自宅までは歩いてもそんなに距離はなかつた。
まだ時間は大丈夫。

今なら、日が落ちるまでには間に合ひやうだ。
私は自分から今野の手を取つた。

「今度は、私に付き合つて。」

そういうと

「何処へでも。」

とおじけて返事をしてくれた。

今度はバスに乗る事にした。
時間はあつた方がいいからね。

段々と近づいてくる風景に今野も

「なるほどね」

と気がついたようだつた。

そこは私達が再会した緑地公園。
そうあの広場だ。

ぐるつと見渡す、今日は弟君いないみたいだね。
きつと今野も同じ事を考えていたみたいで、回りを見渡すとほつと
したよつに一つ息を吐いた。

「今野とはここから始まつたんだよね。」

.....

暫しの無言の後

「もう呼んでくれないんだ、香梨菜は。」

それは拗ねたようなそんな声。

見上げるほどの大好きな身体がほんの少しだけ小さくなつているように見えた。

本当はまだ追いつかないんだよ、だつてもう何年も今野つて呼んでたから。

香梨菜つて呼ばれるのもすぐつたい。

だけど、やつぱり嬉しくつて。

今野もやつ思つてくれるのだつつか。

「陽人、一緒に4葉探そつ。」

改めて呼ぶその名前にちょっと緊張しちゃつて思わず探そつて言つてしまつた。

「ん……じゃなくて陽人の顔を見ないよつて先生に顔を落とした。

「4葉かあ」

そう言つて、陽人も私の隣にしゃがみこんだ。

4葉を探しながら、お母さんのおまじないの話をしたんだ。

ず一つと一緒にいれますように

と願いを込めて始めたこの4葉のおまじないの事を。

陽人はその話を相槌を打ちながら聞いてくれた。

そして、話を聞き終えた後はさつきよりももつと先生に顔を近づけてくれた。

はたから見たら何でおかしな2人だつて思うかな。

あの時の陽人じゃないけれど、コントクトでも探してゐるつて思われるかもしないね。

2人で這い蹲つてみても中々見つからなくて。
大分、太陽も傾きかけたその時、ひつそり隠れるように揺れる4葉のクローバーを見つけた。

「あつた！あつたよ。」

根元から摘んだその4葉を得意げに陽人の前に出した。

すると、陽人も

「遅いって。」

そういうながら、私の前に4葉を差し出した。

啞然となってしまった。

確かにあの時も弟君に先を越されたのだつけ。

だけど、今私の手の中に4葉があるのは紛れも無い事実。
だつてあの時は何日かけても見つからなかつたんだから。

でもね、あの時すんなり一日や一日で見つけられてたら、こうやって陽人と会えなかつたんだよね。

これも、おまじないのお陰だよね。

芝生にしゃがみこみ、二人の4葉を交換して、カバンから取り出したペンドー一人のイニシャルを書いた。

それを英語の辞書ならぬ英語の教科書に挟んだ私達。

まさか、陽人が一緒にしてくれるだなんて思わなかつたけれど、結

構のつてくれたみたいで安心した。

だって、そんなのつて一笑されるかもなんても思ったから。

そして、陽人が言つてくれたんだ。

「ずっと一緒にいような。」

つて。

私も

「逃げ出したくても逃げられないかもよ。」

と英語の教科書を持ち上げた。

「上等。」

と笑つた陽人。

あの時に見た笑顔と同じだった。

4葉のクローバーは恋のおまじないとなつて、本当に私に恋をくれた。

4葉のクローバーのおまじない時代とともに変化して、沢山の人に引き継がれて。いくつもの友情や恋を見守つてくれていたのだろうね。きっとこれからも。

4葉のクローバー（後書き）

はじめで読んで下せりてありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6054e/>

恋のおまじない

2010年10月11日17時27分発行